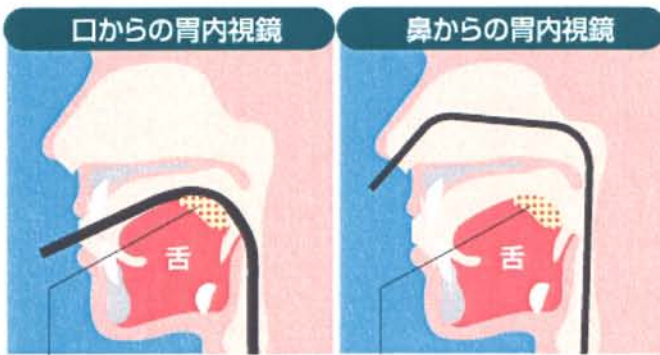


胃カメラが苦手な方へ 「鼻から胃カメラ」の特長

経鼻内視鏡の直径は、小指の先より細い5.9mmで、画質や視野角は、10mmの経口内視鏡に匹敵し、内視鏡が苦手な方の胃がんの早期発見に有効です。またバリウムと比較して被曝線量もなく安心です。

特長1 吐き気が少ない検査です。



この部分にスコープが触れると、吐き気を感じます。 この部分に、スコープは触れにくい。

風邪をひいたときの診察で、舌の奥をへらみたいなもので押されて「オエッ」となりそうな経験をしたことがあると思います。これを咽頭反射（いんとうはんしゃ）といいます。口から内視鏡を入れる場合は、多少なりともこうした咽頭反射が起こります。ところが、鼻から入れる場合は内視鏡が舌の根元に触れないので、ほとんど吐き気をもよおすことなく検査を受けることができます。

特長2 検査中に話ができます。



口から内視鏡を入れると、口がふさがってしまうために検査中は話できません。

しかし、鼻から入れる場合は口を自由に動かせるので、検査をしている医師と

「痛くありませんか？」 「はい、大丈夫です」

というような会話ができます。

気になったことをその場で確認できるので、安心して検査を受けられます。

特長3 体にやさしい検査です。



鼻からの内視鏡は鼻腔（びくう）へスプレーをして出血を予防し、ゼリー状の液体を流し込んで局部麻酔を行います。鼻の中に注射するようなことはありません。

麻酔に用いる薬が少量であるため、体への負担も少なく、検査終了後30～60分で水を飲んだり食事をしたり、車を運転することもできます。